2023年6月9日「秋田魁新報」掲載　（「秋田の風」日本銀行秋田支店長コラム）

秋田の風

日銀秋田支店長コラム

新しいお札と秋田

「稀なる天恵」生かして

「稀なる天恵豊かな地」である秋田。その天恵を活用するためにも、「協同一致（互いに力を合わせて心を一つにすること）の観念」と「勇気と忍耐」をもって事業を継続し、新たな事業をも開発してほしい―。

1917年、当時の秋田銀行相談役を務めていた渋沢栄一が、県会議事堂などで演説を行った際に、秋田県民への希望として語った言葉だ。その渋沢栄一が、来年度上期をめどに発行される新しい1万円札の肖像となる。

日本で新しいお札（日本銀行券）が発行されるのはおよそ20年ぶりだ。筆者は、以前、その発行準備に携わっていた。そのため、おそらく人より少しだけ思い入れも強いので、本コーナー最初の話題として、お札の話をしてみたい。

お手持ちのお札を、じっくり観察していただきたい。数字や肖像のほか、さまざまな模様や文字、絵が、細かな線や点で描かれている。拡大鏡を使って何とか見えるマイクロ文字も潜んでいる。紙自体にも透かしや凹凸、光沢が施された部分があり、1万円札と5千円札には見る角度により模様が変化して見えるホログラムが貼ってある。

新しいお札ではこうした偽造防止の技術に加え、券種の違いが分かりやすいよう数字を大きくするなどユニバーサルデザインが強化される。その印刷技術の粋が詰まった長さ十数㌔の紙を、今年度、国立印刷局は30・3億枚製造する計画だ。これがどれほど大変なミッションか、製造業に携わる方々なら直感的にお分かりいただけるのではないだろうか。お札は、多くの国民が毎日のように目にするため、少しでも肖像がずれていたり色彩が不自然だったら、おそらくすぐに気が付いてしまう。また、日本中のATMや自動販売機で正しく認知される必要がある。完成度の高さが求められるほか、原料の調達を含む製造の安定性といった課題もある。

今はキャッシュレス化の時代だ。日銀が行っているアンケートでも、近年、現金の利用頻度が「減った」とする回答が「増えた」を大きく上回って推移している。キャッシュレス決済は、消費者の利便性向上やお店の業務効率化にもつながる。今後も安全性を確保しながら、さらに使い勝手を高めてほしい。

その一方で、お札は、誰でも利用できる最もシンプルな決済手段であり、必要性がすぐに低下することはないだろう。災害時などにその力を発揮するのは間違いない。県民の皆さまには、キャッシュレスの利便性も享受しつつ、親しみを持って新しいお札を使っていただけたらありがたい。

話を渋沢栄一に戻したい。当時の渋沢の指摘は、100年以上たった今にも通じる。明治から大正にかけての秋田は、米の生産や林業に加え、鉱山や油田で大いに潤っていた。その後、鉱物資源の産出はだいぶ少なくなり、近年は人口減少にも歯止めがかからない。

しかし、日本中を見渡しても、秋田は引き続き「稀なる天恵豊かな地」である。農業や林業など、以前からの天恵を生かした産業に加え、風力や地熱、水力といったまだまだ利用余地の大きい恵みがある。折しも、持続可能な社会の実現が世界的な課題とされており、その追い風はしばらく吹きやむことはないだろう。

現在、秋田県沖で大規模な洋上風力発電事業が進行中である。これに地元から参画するのは簡単なことではない。ただ、果敢に挑戦している企業もあり、筆者がお話をうかがっていると少しずつ増えてきているようだ。官民を挙げた「協同一致の観念」と「勇気と忍耐」をもって、大きな天恵の活用に向け、新たな事業の開発に取り組んでいくことが期待されている。

改めてお札の全体を眺めてみると、海外の方が初めてお札を手にしたときに、どことなく日本らしさを感じてもらえるようなデザインにまとまっている（と、少なくとも筆者は感じている）。100年後には電子的なお札になっているかもしれないが、そのデザインに秋田の風車が描かれていれば、渋沢栄一はどう感じるだろうか。

◇

日本銀行秋田支店の片桐大地支店長が、本県経済を取り巻くさまざまな「風」を分析し、提言します。随時掲載。

かたぎり・だいち　一橋大卒。97年日銀。発券局総務課長、預金保険機構出向などを経て23年3月から秋田支店長。50歳。長野県出身。